

[成果情報名] ビワ大果性品種「陽玉」の加温施設栽培における摘らい法及び摘果法

[要約] 加温施設栽培ビワ「陽玉」では、早期に開花した花を用いて強摘らい法で摘らいすると大玉果となる。果房に3果を残して摘果する方法は、果実が大きく糖度も高い。

[キーワード] 加温施設栽培、ビワ「陽玉」、開花、摘らい、摘果、果実、糖度

[担当] 長崎果樹試・常緑果樹科

[連絡先] 0957-55-8740、電子メールtakami@pref.nagasaki.lg.jp

[区分] 九州沖縄農業・果樹

[分類] 普及

[背景・ねらい]

ビワ新品種「陽玉」の大果性の特徴を發揮させ、商品性の向上と収量の増大を図るために、摘らい方法及び摘果方法の違いが果実肥大や果実形質に及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 強摘らいの果実は普通摘らいの果実に比べ、1果平均重が大きく、果実品質に差はみられない。早期に開花した花の果実は、晩期に開花した花の果実より種子重が大きく、1果平均重も大きい(表1)。
2. 果房に3果を残して摘果する方法は、4果を残して摘果する方法より1果平均重が大きく、また、4果を残して摘果する方法より果実の糖度が高い(表2)。
3. 果実の階級構成をみると、4果を残して摘果する方法は、L級(40g以上～55g未満)果の割合が増え、「陽玉」の果実特性より小さい果実が多くなる(表3)。

[成果の活用面・留意点]

1. 果房に2果及び3果を残す摘果法は大玉果になるが、着果数は収量に比例するので、2果残すより3果を残した方がよい。
2. 本試験は、1樹内の中に果房に2果、3果及び4果を残す摘果区を設けた処理方法なので、果実重及び果実糖度の処理間の差は有意な差はあるが小さかった。1樹単位に処理した場合は、果房に4果を残して摘果する方法では、果実糖度の低下、果実の小玉化及び隔年結果性が顕著になると推測される。

[具体的デ - タ]

表1 摘らい方法が果実形質に及ぼす影響

(2001)

供試花・処理区	1果平均重 (g)	種子数 (個)	種子重 (g)	糖 度 (Brix)(g/100ml)	酸含量 (g/100ml)	果肉硬度 (g/cm ²)	a/b値 ^z
早期開花・強摘らい	61.2a	3.7	8.3a	12.6	0.27	315	0.40
早期開花・普通摘らい	56.1b	3.6	7.8a	13.0	0.26	337	0.40
晩期開花・強摘らい	55.6b	3.6	7.0b	14.0	0.33	341	0.40
晩期開花・普通摘らい	53.8b	3.5	6.9b	13.2	0.38	361	0.38
有意差あり	**	ns	*	-	-	-	-

^z 果皮色；色差計測定値(a/b；橙色)

注) 数字右の縦の文字間に有意差あり** (1%レベル) * (5%レベル)

表2 摘果方法と果実形質

処 理	1果平均 重 (g)	種子数	糖 度 (Brix)	酸含量 (g/100ml)	果肉硬度 (g/cm ²)	果皮色	
						a ^z	a/b ^y
(2000年)							
2 果	63.0a	2.8b	14.2a ^x	0.25	307	14.8	0.37
3 果	65.2a	3.2a	13.6b	0.25	312	14.7	0.37
4 果	57.9b	2.5c	13.2c	0.28	328	14.7	0.37
(2001年)							
2 果	57.4	3.3	13.2a ^x	0.28	348a	15.4	0.40
3 果	60.3	3.7	13.1a	0.28	322b	15.4	0.40
4 果	56.2	3.4	12.5b	0.28	306b	14.9	0.39

^z a 値；赤色度を示す。

^y a/b値；橙色度を示す。

^x 縦の異なる文字間に5%レベルの有意差あり

表3 摘果方法と果実の階級構成

(%)

摘果方法	5L	4L	3L	2L	L
(2000年)					
2 果	6.3	16.8	19.0	20.0	37.9
3 果	4.5	20.5	21.0	24.0	30.0
4 果	3.9	14.7	16.7	23.5	41.2
(2001年)					
2 果	0.0	0.0	20.0	46.7	33.3
3 果	0.0	6.3	20.8	43.8	29.2
4 果	0.0	5.2	15.5	34.5	44.8

[その他]

研究課題名：新品種「涼風」「陽玉」の栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：平成14年度(平11~15)

研究担当者：高見寿隆、山下義昭